



質問票への協力ありがとうございます！

7歳質問票

千葉ユニットセンター 7歳質問票集計結果から

予防接種 受けた？



人から人にうつる感染症から子どもたちを守るため、さまざまな予防接種が行われています。今回は、ほぼ回収が終了した7歳質問票の結果から、どのくらいの子どもたちが予防接種を受けているかを調べてみました。
(2022年8月2日時点の千葉ユニットセンターのデータに基づく暫定的な結果です)

ワクチンの「定期接種」と「任意接種」、何が違うの？

定期接種

症状が重篤になる恐れがあり、感染しやすいため、社会全体で予防することが必要な感染症に対するワクチンです。積極的に接種することが勧められていて、決められた時期に接種する場合は公費の補助があります。

任意接種

一人ひとりの発症や重症化を防ぐために、個人（保護者）が判断して接種します。

定期接種

BCG 生ワクチン

結核を予防するワクチンです。結核は長引く咳、微熱、だるさなどの症状があり、感染に気づきにくく、重症化したり、集団感染が起こる危険があります。

3種混合 または 4種混合 不活性化ワクチン

ジフテリア、百日咳、破傷風を予防するワクチンです。4種混合にはポリオのワクチンも入っています。ジフテリアは眼球や横隔膜の麻痺、心不全などを起こします。百日咳は激しい咳により、窒息や肺炎を起こすことがあります。破傷風は神経の障害を起こし、亡くなる可能性が高い病気です。接種後 10 年程度で効果が弱まるため、11～12 歳ではジフテリア、破傷風に対する2種混合ワクチンの定期接種があります。

ポリオ 2012年9月から不活性化ワクチンに

ポリオ（急性灰白髄炎）は脊髄性小児まひとも呼ばれ、かかると手足の麻痺が一生残ることがあります。5歳以下でかかることが多いのですが、成人がかかると症状が重く、死亡する確率が高くなります。

麻疹風しん混合 生ワクチン

麻疹は感染力が強く、手洗い、マスクだけでは予防はできません。麻疹にかかったことがなく、ワクチンを2回接種していない人は、成人でも接種が勧められています。風疹は妊娠 20 週頃までの妊婦が感染すると、障がいをもつ子どもが生まれる可能性が高いため、妊娠する可能性がある女性とその家族にも予防接種が勧められています。

日本脳炎 不活性化ワクチン

日本脳炎は、感染した場合に発症する人は 1000 人に 1 人ですが、発症すると亡くなったり後遺症が残る可能性が高い病気です。9 歳～12 歳でも定期接種（2 期）があります。

任意接種から定期接種になったもの

ヒブ(Hib) 2013年4月から定期接種 不活性化ワクチン

ヒブはヘモフィルス・インフルエンザ菌 b 型という細菌の略称です。ヒブ感染症はほとんどが5歳未満で発生します。症状がないまま菌を持っている子どももいますが、肺炎、髄膜炎などが起こることがあります。

小児用肺炎球菌 2013年4月から定期接種 不活性化ワクチン

小児の肺炎球菌感染症は、ほとんどが5歳未満で発生します。集団生活が始まるとほとんどの子どもは菌を持っていますが、肺炎、髄膜炎などが起こることがあります。

ロタウイルス 生ワクチン 2020年10月から定期接種

ロタウイルス感染症はロタウイルスによって起こる急性の胃腸炎です。5歳までにほぼすべての子どもがロタウイルスに感染するといわれています。2回接種するワクチンと3回接種するワクチンがあります。

水痘(みずぼうそう) 生ワクチン 2014年10月から定期接種

水痘（すいとう = みずぼうそう）は水痘・帯状疱疹（たいじょうほうしん）ウイルスによって起こります。9歳以下での発症が多く、成人で発症すると重症化する可能性が高くなります。

B型肝炎 不活性化ワクチン 2016年10月から定期接種

B型肝炎はB型肝炎ウイルスによって発生する肝臓の病気、感染した人の血液などに接触すると感染することがあります。

任意接種

流行性耳下腺炎(おたふくかぜ) 生ワクチン

おたふくかぜは子どもがかかりやすいのですが、大人がかかると精巣炎や卵巣炎が起こることがあり、左右両方の精巣や卵巣で炎症を起こすと不妊症につながる可能性があります。無菌性髄膜炎の割合も高くなります。

インフルエンザ 不活性化ワクチン

インフルエンザワクチンは、感染を防ぐことはできませんが、かかってしまった場合の発症を防いだり、重症化を防ぐ効果が期待できます。効果が続くのは5か月程度で、流行するインフルエンザの型は微妙に変わるので、毎年接種する必要があります。

ワクチンの種類

生ワクチン BCG、麻しん風しん混合、ロタウイルス、水痘、おたふくかぜなど
生きていたウイルスや細菌の病原性・毒性を弱めたものを材料にしています。自然な感染に近いので、強い免疫をつけることができます。

不活性化ワクチン 4種混合、ポリオ、日本脳炎、ヒブ、肺炎球菌、B型肝炎、インフルエンザなど
感染力や毒性をなくしたウイルスや細菌を材料にしています。生ワクチンに比べると効果が弱く、数回接種する必要があります。

メッセンジャーRNA ワクチン 新型コロナウイルス
人間の細胞の中で、メッセンジャーRNAがもつ暗号をもとにウイルスの目印となるタンパク質がつくられます。そのタンパク質に合う抗体をつくって、ウイルスが入ってきたら攻撃します。
他にも、トキソイド(2種混合)、ウイルスベクターワクチン(新型コロナウイルス)などがあります。



ワクチンの効果

- 感染を予防する
- 感染しても発症を予防する(症状は出ないが、他の人にうつす可能性はある)
- 発症しても重症化を予防する
- 周りの人の感染を予防する

ワクチンによって効果に違いがあります。インフルエンザワクチンは、感染予防は期待できませんが、発症予防効果があります。新型コロナウイルスワクチンは、感染、発症、重症化のいずれも防ぐ効果があるとされています。感染や発症の予防効果は日が経つにつれて徐々に下がりますが、重症化を防ぐ効果は期待できます。

※ワクチンは接種してから効果が出るまでに2週間程度かかるため、それまでに感染してしまうと発症することがあります。

ワクチンを接種したあとの副反応を心配する人もいますが、感染症にかかった場合は、重症化する危険や、周りの人に感染を広げる危険が大きくなります。ワクチンの必要性と副反応の可能性を正しく理解して接種するかどうかを判断しましょう。

